

東西蝦夷山川  
地理取調紀行

# 天鹽日記

多氣志樓蔵板

A northern large river,  
Teshio River, and "Teshio Diary"  
by Takeshiro.

## 北の大河・天塩川と武四郎

あしたを創る 北の知恵  
北海道開発局  旭川開発建設部  
名寄河川事務所

〒096-0016 名寄市西6条南9丁目 TEL(01654)3-3177

<製作・監修>北海道開発局 旭川開発建設部 名寄河川事務所  
<協力>名寄市北国博物館  
北海道開発局 留萌開発建設部 幌延河川事務所

※このパンフレットは、再生紙を使用しています。  
2018.3

# 「テシホ(天塩川)は北海道の西部にあって、北海道第二の大河である。」 160年前の夏、天塩川を上る一人の男がいました。

松浦武四郎が蝦夷地(現在の北海道)に渡り、この地の第2の大河、天塩川を探索したのは、幕末の安政四年(1857年)6月のことでした。武四郎は、アイヌたちとともに川筋をたどるかたちで、ひたすら天塩川源流へと向かいます。当時の天塩川流域を探検した記録である「天塩日誌」を振り返りながら、現在の川の流れに重ねあわせるとき、新たな天塩川の流れが発見されることでしょう。

## はるかな時空を超えてよみがえる、天塩川の姿。

### 探検家 松浦武四郎

蝦夷地が「北海道」と称されるようになったのは明治2年(1869年)、箱館戦争が終わった4か月後のこと。蝦夷地探検家として知られる松浦武四郎は、この「北海道」の名づけ親でした。

武四郎は、文化15年(1818年、明治のはじめより50年前)、伊勢の国(現在の三重県)で生まれ、少年のころから山登りを好み、諸国遍歴の夢を抱いて17歳のとき生家を出て、その後26歳までの10年間で本州、四国、九州のほとんどを踏破したといえます。武四郎は少年のころから、一日40km歩くのが普通で、後年になると60kmから70kmを歩き、野宿などをすることは平気だったといえます。

本州をひと通り探検した彼は、28歳(1845年)で初めて蝦夷地へと渡ります。武四郎の目的とするところは「寛政以来幕府は蝦夷地を調査したけれども、みな海岸をめぐり、その内陸を探索したものは誰もいない。自分は山脈や川筋を極め、人や物産を探して、国のために役立てよう」というものでした。彼は、小さな羅針(磁石)だけを持って探検し、初めて蝦夷地を訪れた時には全くわからなかったアイヌ語も覚え、4度目の探検時には幕府より蝦夷地御用御雇入の命を受けます。この蝦夷地探検は通算6度にもおよび、遠く樺太まで探検しています。

武四郎の探検は、安政5年(1858年、明治のはじめより10年前)ひと通りの調査を終えます。28歳から41歳のほとんどを費やした大調査でした。その後、武四郎は二度と蝦夷地を踏むことはなく、公務を辞職した彼は、探検日誌と地図の完成に専念し、探検日誌114冊、地理取調紀行22冊、地図28枚を作りました。そこには山地、河川、地名、道路等が詳細に描かれ、かつて伊能忠敬・間宮林蔵らの測量で未完であった北海道の内陸の地勢を初めて克明な形で明らかにしています。

幕府が倒れ明治となった明治元年(1868年)新政府に用いられ、翌2年に開拓判官に任ぜられたとき、武四郎の意見によって蝦夷地から今の『北海道』の名称が生まれます。その後判官を辞職した彼は、明治21年、71歳でその生涯を閉じました。

### 天塩日誌

武四郎が木版本として出版した『天塩日誌』は、安政4年(1857年)、今から160年前の天塩川の姿を記しています。武四郎の北海道探検としては5回目にあたり、この年日曆の4月から5月にかけては石狩川、そして6月に天塩川を調査しています。

武四郎は石狩川河口から浜益港を経由して天塩川河口に至り、天塩港で、米、ミノ、こうじ、タバコ、薬などいっしょに、縄、むしろ、ござ、鍋などの宿営道具を用意しています。川をたどるための丸木舟は、武四郎が乗る舟と荷物用の2艘で、各々2人ずつのアイヌの人が乗り込みました。丸木舟は、不安定な舟ですが、扱いに慣れたアイヌの人が巧みに川を漕ぎました。

武四郎はそんな中で数百メートルごとに方位を計り、距離と地形を記録しました。このようにして書き留められた野帳は、命よりも大切に違はなく激流の中でも、墨しかない当時を考えると、その野帳を水から守るだけでも大変な苦勞だったことが想像できます。

「天塩日誌」は、それまで知られることのなかった蝦夷地最北端の内陸部の様子を詳しく観察し、川の流れや、深さ、川岸の様子、自然や生き物をアイヌ語地名とともに記しています。そこにはアイヌの人々の生活の様子とともに、前人未踏の天塩川の自然を彷彿させます。

現在の川と見比べる時、当時の天塩川の姿がきつとよみがえることでしょう。



松浦武四郎 肖像 (北海道立文書館 所蔵)

まつうら 松浦	たけしろう 武四郎	りやくねんぶ 略年譜	
●文化15年 (1818)	三重県一志郡須川村(現松坂市)に生まれる。17歳から本格的に全国各地をめぐり旅に出る。		
●弘化2年 (1845)	東蝦夷地調査(第1回)	28歳	
●弘化3年 (1846)	西蝦夷地調査(第2回)	29歳	
●嘉永2年 (1849)	千島等調査(第3回)	32歳	
●安政2年 (1855)	幕府より蝦夷地御用御雇を命じられる	38歳	
●安政3年 (1856)	蝦夷地、樺太を調査(第4回)	39歳	
●安政4年 (1857)	石狩川、天塩川を調査(第5回)	40歳	
●安政5年 (1858)	東蝦夷地を調査(第6回) 江戸に住み始める	41歳	
			●安政6年 (1859) 『東西蝦夷山川地理取調図』等を完成 42歳
			●文久3年 (1863) 『天塩日誌』を出版 46歳
			●明治2年 (1869) 明治政府より蝦夷開拓御用掛後に開拓判官を命じられる 道名・郡名等を建議する 52歳
			●明治3年 (1870) 官職を辞し江戸で出版や旅行の生活 53歳
			●明治21年(1888) 東京神田の自宅で死去 71歳

## History of teshio diary

小さな丸木舟でゆく天塩川の流は、  
一歩中に足を踏み入ると、  
まさに原始の川の姿、そのままでした。

### ■ 武四郎、天塩川24日間の足跡

武四郎の天塩川探査に要した日数は、往復で24日間(安政4年6月7日に出発、同月30日天塩に帰着(新暦では7月27日から8月19日)。道らしい道はなく、終始川筋を舟で行くほかなく、河口も上流も、自然のままの状態でした。川は洪水などで絶えずその様相が変わり、流域ではアイヌの集落もまれで、行けども行けども人の背丈をこえる密林と流木、倒木の中、おびただしい蚊やあぶに攻め立てられる有様でした。

武四郎は、川筋をたどるかたちで、幌延、雄信内、中川と進み、音威子府、美深を過ぎて名寄に着きます。ここで名寄のアイヌの小さな村を拠点とし、一度天塩川本流を離れ、支流の名寄川からサンル川まで舟で進み、その川筋を遡りそこでアイヌの人たちから幌内に出る道筋を教えられたといひます。

そこから再び名寄に戻り、さらに本流を上って、剣淵川との合流点に着きます。剣淵川沿いの地形を見たあと、また本流を土別方面へたどり、天塩川上流、その源近くの山に登り、遠く石狩と北見境のチトカニウシ山や天塩岳を望んだといひます。

帰途、天塩川は雨で増水し、一気に名寄、美深、音威子府へと下り、5日間ほどで天塩に着いたようです。



恩根内テッシ



天塩川の河口付近から見た利尻島  
「天塩日誌」より(名寄市北国博物館蔵)

「東西蝦夷山川地理取調図」より  
(名寄市北国博物館蔵)

## Outline of teshio river

### ■ 天塩川流域の姿

#### ■ 流域の概要

日本最北の大河、天塩川はその源を北見山地の天塩岳(標高1,557.6m)に発し、北流しながらいくつかの狭窄(きょうさく)部を抜け、日本海に注いでいます。流域面積は5,590km<sup>2</sup>、その長さは256kmで、全国でも信濃川、利根川、石狩川に次ぐ大河です。また、流域の上流部は天塩岳道立自然公園、下流部は利尻・礼文・サロベツ国立公園に指定され、緑豊かな自然と動植物が見られる河川として知られています。

南北に長い天塩川水系には、中心の天塩川本流に両側から多くの支流が合流し、まるで鳥の羽のような形をしています。武四郎の天塩川探査でも、その合流する川1本1本を確認する地図が残されています。

## 北へ向かう大河、天塩川の現在の流れ



オジロワシ



エゾカンゾウ

#### ■ 自然

天塩川流域には約200種の鳥類が生息しているものと思われる、国の天然記念物に指定されているオジロワシなどの繁殖が見られます。また魚類相も豊富で、最も多いのはウグイ、フクジヨウ、ハナカジカ等で、絶滅の恐れのあるイトウの生息も確認されています。ほ乳類では、近年ヒグマの減少傾向がある一方、キタキツネやエゾタヌキが多く生息しています。

流域は北海道北部に位置しているため、低山地でも多くの高山植物が見られます。また6~7月の湿原では、ハマナス、エゾスカシユリ、エゾカンゾウ、ノハナシヨウブなどの花が一斉に咲き乱れて美しい風景を見せます。

このような流域の自然の姿も武四郎の興味を引いたようで、「天塩日誌」では160年前の天塩川流域の動植物の姿が生き生きと描かれています。

## 武四郎の見た天塩川は、現在へとつながっています。



### ■ 上流部

天塩川の源流は、上川地方と網走地方の境界にまたがる天塩岳から始まり、急傾斜を流れ落ちながら険しい山肌を縫って流れます。上流部は、武四郎が天塩川の源流を探し求めた当時のままの川の姿が見られます。岩尾内ダムから土別市へと向かう流れは、武四郎が探査を試みた支流の剣淵川と合流し、名寄盆地へと向かいます。



### ■ 中流部

天塩川の中流部は、武四郎が「一国ほどの広さがある」と記した名寄盆地をゆるやかに流れていきます。武四郎は、天塩川の支流名寄川上流をたどって途中のサンル川まで探査しています。天塩川の名前の由来ともなり、すぐれた景観を有し、カヌーイストを魅了する露岸地形である「テッシ」(築のような岩)が多く存在する中流部は、山間の平野といくつもの狭窄部を流れ、昔から交通の難所として知られて来ました。



### ■ 下流部

天塩川の下流部は、その流れを海に向かって大きく方向を変えて進みます。武四郎のたどった頃の天塩川は、中下流部に多くの屈曲部がみられました。天塩平野、サロベツ原野など広大な平地を利用した畑作と酪農地帯が広がる下流部は捷水路工事による多くの旧川が残されています。また、汽水域である本川下流やサロベツ原野の沼では、ヤマトシジミ漁が盛んです。

テッシとは築(やな)のこと。天塩川の川底は平たい岩盤の所が多く、これらの岩が築の柵を結び合わせたように見えるので、その名があるという。

**【7日】出港サロベツ原野** ※新暦 7月26日  
6日、南風が強い中、堀奉行(天塩川探検を許可した箱館奉行)と別れ、翌7日に武四郎一行は天塩川の上流に向けて漕ぎ出します。丸木舟は二人乗りで、石狩川探検で乗った舟の半分くらいの大きさでした。河口付近は蚊が多く、群がってくるのでやりきれなかったようです。サルプト(サロベツ河口)付近は鮭の漁場で、以前は鮭が沢山上がったということでしたが、今は非常に少なくなったといいます。この当時、天塩川河口は上流からの流木が多く、そのために河口がよく変化し、綱引きができなくなったことが原因のようです。流れは屈曲し、ボゴノブ(幌延町)を過ぎて野宿します。

**【8日】** ※新暦 7月28日  
朝、霧雨がもやのように降るなか出発。両岸が山続きになり、崖の崩れた場所大きな埋木(うもれぎ)を見つけ割ってみると黒茶色で非常に堅く、火にくべるとよい香りがしました。川には水が湧き立って見えるほどの沢山のウイが見られました。

**【9日】** ※新暦 7月29日  
夜明け前に出発。行き先も見えないような濃い朝もやの中、いろいろな水鳥が舟の帆の音に驚いて鳴きだす。川岸で腹痛などに効くコリノトの鉱石がよく見つかるといことを聞いた武四郎は、この天塩川の上流のどこかに、そうした珍しい鉱石を見つけて出すことができるかもしれないと期待を寄せます。川は急流になり、岸から舟を綱で引いて上ります。川底が真っ黒に見えるほどのカラス貝を見つけ食用に捕っています。

**【10日】** ※新暦 7月30日  
平地が続く舟は進み、ここからニウブ(美深町仁字布)の上流までの間、潮と淵が間隔を置いて続くのは川底に岩層が続いているせいだと観察しています。チョウザメが群れを成し舟はたまに上がってくるのを気持ち悪がります。白樺の木が多くなるあたりの岩場につばめの巣が沢山あり、驚いて飛び立つ姿を、まるでつむじ風に舞う無数の木の葉のようだと書いています。

**【11日】** ※新暦 7月31日  
カムイルウサン(中川町神居山)の絶壁は、まさに深山幽谷(しんざんゆうこく)の奇景。そこは強い神霊のこもった場所であるといわれ、川幅は急に狭められて、水が滝のような勢いで流れています。トンベツホ(音威子府村頓別坊)に家がありここに泊まることにした武四郎は、夜近くにしがりに「ホッ、ホッ、ホッ」と鳴く鳥の音が、聞きよでは「仏法、仏法」とも聞こえ、これがあの有名な仏法僧(ぶつぼうそう)だと思ったといっています。 ※深山幽谷:奥深い山と静かな谷

**【12日】** ※新暦 8月1日  
モノマナイ(音威子府村物満内)で、またチョウザメを沢山見ます。オクルトマナイ(美深町小車)に来て泊まり、夜になるとこの家の女性が五弦琴(ごげんきん)を弾いてくれ、その音色がいかにも奥ゆかしく雅びたと武四郎は感心します。

**【13日】紋穂内テッシ** ※新暦 8月2日  
すがすがしい晴(あかつき)の風に吹かれ、急流のテッシというところを過ぎます。「川の中の岩が一列に並んで、築をかけたように見えるが、ここには大音に神が岩を並べたという伝説があり、神聖なところと考えられている。テッシはやな(築)のことである。」ここで初めて武四郎はテッシの意味を知ります。

**【14日】名寄** ※新暦 8月3日  
チエフンド(名寄市智恵文)を過ぎてさらに行く川が二股になり、左がナイブト(名寄市内測)右が本流と分かれます。このあたりから東南を望むと、有に十里もの平野が見晴れ、これは本土の一隅にも当たるほどの広さと記します。ナイブトの家に泊まり、このあたりは鶴や雁、鹿などが多くいて、鹿肉をこごそうになると、「その肉のうまいこと、あごが落ちそうであった」と感激しています。

**【15日】名寄川** ※新暦 8月4日  
武四郎は一度本流から離れ、ナヨ川上流を目指します。緑の葉がけが冷えびえと暗く、朝露が雨のようにしたり落ちるなか、川面に垂れ下がった枝を分けるようにして舟を進ませます。この辺りの川に、マスを獲るやな(築)が沢山かけてあるのを見ます。しばらく行く川底がごろごろの石で、急流となります。チノミ(下川町上名寄付近)で家を見つけ泊まらせてもらいます。ここは川の水がきれい、蚊や蜆が少ないと書いています。

**【16日】サンル川** ※新暦 8月5日  
上流に行くにつれ倒木・流木に行く手をはばまれ、その度に木を伐り、倒れた大木の下を潜りぬけたりしながら舟を進めます。何本目の川の合流点で水量が減り舟で行くことが困難となり陸に行くことにします。やがて本流から左、サンル川の方にいきますが、この川の両岸は、がま・柳・桑などが繁り、山ぶどうのつるがからまっで進むのに非常に難行します。しかも小さな沢がいくつもあり、これがこの川の本流がわからなくなってしまう。夕方高山の麓にあるアイヌたちが使う小屋(チセ)に着き、夜を明かすことにしました。

**【17日】峠** ※新暦 8月6日  
朽た木や倒木を飛びこえ、やがて峠に出ます。「ここからは、斜里、紋別の海が広々と見える。この峠をこのまま越えて行くとはホロナイ川の上流に出る。堅苦の上を行くと約2日半の行程という。」その後、峠から昨夜の小屋に降りります。(サンル川上流について、この辺りに海が見える地点があるかどうかは疑問で、武四郎がアイヌから聞き書きしたフィクションではないかと思われる。)

**【18日】チノミ** ※新暦 8月7日  
雨模様の中、夕暮れ少し前に武四郎一行は、チノミに戻ります。アイヌの家でもてなしを受けていると、夕方川の流れが滞ってきました。

**【19日】ナイブト** ※新暦 8月8日  
盆をかたむけたような激しい雨が降り、一ときの間で晴れる。川の流れを下り、昼過ぎナイブトに戻ります。

**【20日】ヘタヌ** ※新暦 8月9日  
おだやかな朝。舟を出して天塩川本流に戻ります。このあたりの川は、川底がずつと砂利で急流。右は幾層にも山並みが続き、左は原野です。右のウリウルベシベ(名寄市有利里川)の川筋は、ウリウ(雨竜郡)方面への山越しの道筋になっていると聞きます。天塩川本流と剣淵川の合流点ヘタヌまで来て、このあたりの家に泊まります。ケネフチ(剣淵川)は天塩川第二の支流で川沿いに小集落が点々とあり、その上流は二つに分かれ右へ雨竜方面、左へ石狩川方面(比布川)へと向かい、昔はこの川筋をアイヌ達が石狩川上流へと年中往来していたと聞きます。

**【21日】土別市** ※新暦 8月10日  
ケネフチ(剣淵川)を五十町余り上って大体の地形を見て合流点まで引き返し、シベツ(土別市)で天塩川本流に入りますが、川の流れが幾層にもなっている上、流木・倒木にも悩まされ、四苦八苦しながら舟を進めてサツケベツ(土別市中土別町付近)に泊まります。

**【22日】** ※新暦 8月11日  
川はいよいよ急流になり、多くの流木や倒木が流れをはばんでいます。このあたりに赤い岩を見ます。右は高い山続き、左は低い陸が重なり合って続き、舟を岸についで陸に上がり出て行くことにします。バンケヌカナン川の上流は、はるか石狩のアイベツ(愛別)の上流と峠をへだてて向かい合っていると聞きます。さらに、川岸伝いに鹿道を進み、笹を分けながら進んで川辺で野宿します。この辺りの川にサリガニが沢山いて、焼いて食べるとおいしいとも書いています。

**【23日】天塩岳** ※新暦 8月12日  
密生したやぶを分けながら、川筋に沿って山に登ります。この山の南南東の方向に、重なり合った嶽の奥、丸い形の高い山が見え、それが昨年石狩岳(大雪山系)から見たテセウ岳(天塩岳)の姿だと確認します。天塩川の上流はまさにこの山から流れ出ているのでした。後ろをふり向くと、雲が谷から一面に立ち上ってきて、あちこちで雷鳴が聞こえてきました。

**天塩日誌行程**

往路(行き) 復路(帰り)

※旗の位置は、武四郎宿泊推定位置であり目安です。  
※本地図の内容は「天塩日誌」の記述に準拠しました。「天塩日誌」に関しては、読み物として公刊されたものであり、フィクションも多々含まれているとの解釈が通説ですが、ここでは武四郎の足跡を概ね理解する意味で採用しました。より正確な記述とされる「丁巳東西蝦夷山川地理取図日誌」の中「天塩日誌」との付け、場所の違いが若干生じています。また、異なる見解もあると思われる。

**【24日】** ※新暦 8月13日  
バンケヌカナンを過ぎて、昼頃サツケベツに着きます。

**【25日】** ※新暦 8月14日  
小雨のけむる中をナイオロブ(名寄)に着きます。

**【26日】** ※新暦 8月15日  
昨夜の雨も止み晴天になりましたが、川の水は普段の量の2割ほど増えている、舟を出す川の流れが非常に速く、夜にはオクルトマナイまで着いてしまいます。

**【27日】** ※新暦 8月16日  
ユアニホリ(鬼刺山)のあたりまで来たとき、熊を頭見つけます。急いで下流まで舟で下り、そこからアイヌたちは犬を2、3匹連れ熊の足跡を追い、夕方熊をとめて帰って来ました。その夜、オニサツペで、アエトモ長老から話を聞きます。

**【28日】** ※新暦 8月17日  
川が増水して、普段の3割にも増えています。そのため船足が速く、夜はバンケナイ(中川町)に着き、野宿。食料の備蓄も少なく、この辺りのカラス貝(ビバ)を獲って食料とします。

**【29日】** ※新暦 8月18日  
曇り空、夜はタカヤシリ(幌延町)に野宿。この辺りは鶴が多く、一晩中その鳴き声を聞きます。

**【30日】天塩港** ※新暦 8月19日  
曇り、夕方天塩の役所に着きました。

**【7月1日】** ※新暦 8月20日  
今回同行し、天塩川上流まで案内してくれたアイヌたちに、手当ての木綿布や湯、たばこ、針、糸などを渡し労苦をおねぎります。

**【2日】** ※新暦 8月21日  
旅行中ずっと寝食を共にした4人のアイヌたちと別れをつけ、出発。馬を飛ばして夜にはフレベツ(苫前郡初山別村風連別)に着きました。

**天塩川の名の由来**

天塩川の名前は、アイヌ語の「テッシ・オ・ベツ(築・多い・川)」由来しており、川床の岩が《築》のような形で横断していたという中流部の地形に由来しています。武四郎の美深宿営の13日の記録では、「テッシ」からテシホ(天塩川、天塩)の名が生まれ、現在では、天塩川語源発祥の地の碑が立っています。またびふかアイランドのせせらぎ水路。この紋穂内テッシの姿を再現したものです。 ※築(やな)とは、川の流れの大部分を石、木、竹などで仕切り、残りの仕掛けの部分に、魚を隠し込んで捕らえる漁法のこと。

その名の由来、現在では、天塩川語源発祥の地の碑が立っています。またびふかアイランドのせせらぎ水路。この紋穂内テッシの姿を再現したものです。 ※築(やな)とは、川の流れの大部分を石、木、竹などで仕切り、残りの仕掛けの部分に、魚を隠し込んで捕らえる漁法のこと。

カヌーイストのための「天塩国パスポート」が発行されました。「天塩国パスポート」は、カヌーツーリング大会「ダウン・ザ・テッシ・オー・ベツ」に参加者に配布されます。このパスポートは、天塩川を下った分だけマイル認定する、マイルシートを兼ね、ツーリング記録簿や流域の温泉・キャンプ場ガイド、その他、医療機関や観光案内の問い合わせ先などを掲載しています。



# 天塩川流域 市町村 紹介



**【天塩町】てしお**  
「テシ・オ・ベツ ― 築・多い・川」  
天塩川河川公園からは天塩川とその向こう日本海に浮かぶ利尻島の美しい姿を一望することができます。鏡沼海浜公園にはハマナスやエソカンゾウなど50種類の花が咲き、その周辺はキャンプ場としても整備されています。また、日本海に沈む夕日が一望できる「てしお温泉夕映」もあります。



**【音威子府村】おといねつぷ**  
「オ・ト・イネ・ブ ― 川尻（を歩く）・泥んこである・もの（川）」  
面積の約86%が森林に覆われた北海道で一番小さな村。夏は川遊び、冬は「音威富士スキー場」でゲレンデスキーやチセネシリクロスカントリースキーコースでクロスカントリースキーなどアウトドアスポーツが楽しめます。緑深い森に囲まれた「天塩川温泉」も人気です。



**【美深町】びふか**  
「ビウカ ― 石原」  
カヌーが楽しめる大きな水辺のある「びふかアイランド」は、北北海道の観光拠点として人気のスポット。道の駅や物産館、びふか温泉、キャンプ場などが整備されています。また公園内のチョウザメ館ではチョウザメが展示・繁殖され、キャビアなどチョウザメ料理がまちの特産品になっています。



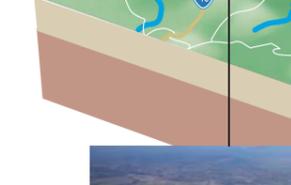
**【士別市】しべつ**  
「シ・ベツ ― 大きい・川（本流）」  
士別市は道立自然公園に指定される標高1,557.6mの天塩岳を有する田園都市。「サフォークランド士別」をキャッチフレーズにサフォーク羊を生かしたまちづくりを進めています。このほかキャンプ場がある「岩尾内湖」や、北海道らしい丘陵地帯が広がる「かわにしの丘」も人気スポットです。



**【和寒町】わさむ**  
「アッ・ニ ― ニレノキ・傍」  
春の一目千本桜がドライバーの目を楽しませてくれる「塩狩峠」は作家三浦綾子さんが書き上げた「塩狩峠」の舞台。基幹産業は畑作を中心とした農業で、中でもカボチャの作付けは日本一を誇るカボチャのまち。秋に収穫したキャベツを雪の下で貯蔵した「越冬キャベツ」の産地としても知られています。



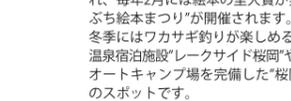
**【剣淵町】けんぶち**  
「ケネニ・ベツ ― ハンノキ・川」  
「絵本のまち」をテーマにしたまちづくりが進められ、毎年2月には絵本の里大賞が発表される「けんぶち絵本まつり」が開催されます。自然が豊かで、冬季にはワカサギ釣りを楽しむ桜岡湖を中心に、温泉宿泊施設「レークサイド桜岡」やパークゴルフ場、オートキャンプ場を完備した「桜岡公園」がお勧めのスポットです。



**■岩尾内ダム**  
天塩川上流に建設されたダムで、昭和45年に完成。洪水調節、灌漑用水の供給、工業用水、水道用水、発電を目的とした多目的ダムです。総貯水容量／1億770万m<sup>3</sup>



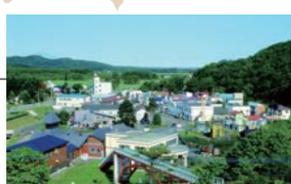
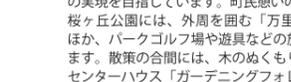
**【下川町】しもかわ**  
「バンケ・ノカナン ― 下の・小さい・川」  
町の面積の9割が森林で、2030年までに誰もが豊かに暮らせるまち「環境未来都市しもかわ」の実現を目指しています。町民憩いの場である桜ヶ丘公園には、外周を囲む「万里長城」のほか、パークゴルフ場や遊具などの施設があります。散策の間には、木のぬくもりあふれるセンターハウス「ガーデニングフォレストレブ」でひと休み。



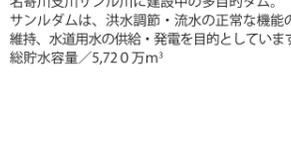
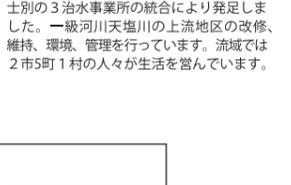
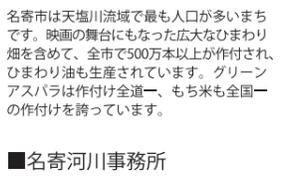
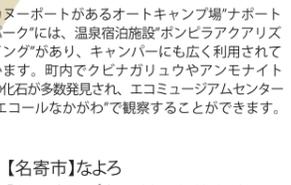
**■サンルダム**  
名寄川支川サンル川に建設中の多目的ダム。サンルダムは、洪水調節・流水の正常な機能の維持、水道用水の供給・発電を目的としています。総貯水容量／5,720万m<sup>3</sup>



**【幌延町】ほろのべ**  
「ボロ・ヌブ ― 大きい・野原」  
利尻礼文サロベツ国立公園の入り口に位置する、自然豊かな酪農のまち。24,000haの広さを誇る利尻礼文サロベツ国立公園の中にある「サロベツ原野」にはエソカンゾウやツルコケモモなど550種類を超える草花が咲き誇ります。トナカイを観光資源とした「トナカイ観光牧場」があり、冬期間のトナカイのソリは特に人気です。



**【豊富町】とよとみ**  
「イベ・コル・ベツ ― 食物（魚）を・持つ・川」  
「豊富牛乳」で知られる酪農のまち。約1,500haの総面積を誇る「大規模草地」では約1,500頭の乳牛が放牧され、良質な牛乳が全道及び一部本州に出荷されています。日本最北の温泉郷「豊富温泉」は湯治場として人気の温泉で、全国から訪れる湯治客は年々増加しています。



# 天塩川流域おすすめスポット

市町村	名称	案内
天塩町	天塩川歴史資料館	旧役場庁舎を利用した赤レンガの建物には、天塩町が天塩川とともに歩んだ地域の歴史や、生活文化、教育などの貴重な資料が展示されています。
	天塩町鏡沼海浜公園	松浦武四郎の像が建つ鏡沼の周辺にはキャンプ場や天塩温泉「夕映」が隣接し、「しじみまつり」などのイベントの開催場ともなっています。
豊富町	サロベツ湿原センター	サロベツ原野の玄関口に「人と自然の共生」をテーマとした展示エリアがあり、表に出ると湿原を木道で散策できます。
	兜沼公園キャンプ場	この地域の最北のキャンプ場で草地のサイトが広がり、開放的で居心地の良いキャンプサイトを提供しています。
幌延町	トナカイ観光牧場	フィンランドからやってきた幌延生まれのトナカイがいる、国内最大のトナカイ牧場。トナカイは人なつこくおとなしい性格で、冬のイベントには、トナカイがソリを引く「トナカイホワイトフェスタ」が開催されます。
	金田心象書道美術館	幌延町が生んだ書家、金田心象の作品を展示する、日本初の書道美術館。書物のほか、硯や陶器を收藏し、日本書道界における偉大な足跡をたどることができます。館内には、落ち着いた空間とゆっくり流れる時間の中で「書のこころ」と向き合える「書カフェ」を併設しています。
中川町	中川町エコミュージアムセンター自然誌博物館	町に広がる白亜紀の地層から発見されたクビナグリユウや大型アンモナイトなどの化石と地質、天塩川や中川の動植物などの自然、擦文時代から現在に至る中川の歴史などを収蔵・展示しています。
	オートキャンプ場ナポートパーク	ゆったりした天塩川の流れと深緑の里山に見守られているかのような、豊かな自然と、充実した設備が自慢のオートキャンプ場です。
音威子府村	エコミュージアムおさしまセンター「アトリエ3モア」	館内には砂沢ピッキの作品が200点上展示され、ピッキ氏が生きた時代・創作・制作活動を続けた成島での時間を感じることができる空間です。
	天塩川リバーサイドキャンプ場	使用料無料のキャンプ場で、隣接した天塩川温泉の大浴場と大自然の中でゆっくり旅の疲れを癒すこともできます。
美深町	森林公園びふかアイランド	美深市街から北へ約8km、国道40号線沿いに広がる「森林公園びふかアイランド」は、自然と触れ合いながら遊べる自然体験ゾーン、チョウザメの水族館は必見。
	トロッコ王国	旧国鉄・美幸線が昭和60年に廃止され、平成10年7月からトロッコの運行という形で鉄路が蘇りました。往復10キロの「走る森林浴」を満喫できます。
名寄市	名寄市北国博物館	寒冷・多雪な名寄市の気候風土をパネルや模型を使い、わかりやすく解説した博物館。北国の暮らしの変遷が一目で分かるように、住居や暖房器具の実物資料を数多く公開しています。
	なよろ市立天文台きたすばる	一般公開される望遠鏡としては日本で2番目の大きさの口径を持つ「ピリカ望遠鏡」（北海道大学所有）や最新設備のデジタルプラネタリウムがあります。
下川町	名寄ピヤシリススキー場	初級者から上級者まで幅広い層に楽しんでいただけるゲレンデとなっており、9本のパラエディに富んだコースで構成されています。ときに氷点下30℃にもなる厳しい自然環境だからこそ味わえる日本一の雪質をご堪能ください。
	万里長城・桜ヶ丘公園	市街地から南へ1キロメートル、緩やかなカーブを描く丘陵に突如として延々と続く石の城壁が現れます。それが下川町のシンボル「万里長城」です。下川町のイベント会場として利用されるほか、パークゴルフ場も隣接し、町民憩いの場となっています。
士別市	五味温泉	国内でも珍しい炭酸ガスを含んだ良質な「含二酸化炭酸水素塩泉」で、「美人の湯」「心臓の湯」などと称される貴重な温泉です。露天風呂から臨む下川の大自然を満喫できます。
	岩尾内湖白樺キャンプ場	芝生のサイトに自由に車の乗り入れが可能です。白樺に囲まれた自然の中で湖を眺めながらゆったりとした時間の流れを楽しめます。
	士別市立博物館	北国の厳しい自然の中で、今日の士別市の礎を築いた先人の偉業を偲び、より良い明日への文化を創造する場です。博物館の展示は天塩川の源流域から、中流域の自然と歴史を紹介しています。
剣淵町	羊と雲の丘	サフォーク種の羊を中心に、観光牧場で100頭を超える羊が放牧されています。「世界のめん羊館」では、世界各国の珍しい羊が多く飼われていて、「レストラン羊飼いの家」では地域ブランド羊肉「士別サフォークラム」をはじめ、雄大な景色を見ながら様々なメニューが楽しめます。また、「めん羊芸館くるん」では羊毛を使った工芸体験ができます。
	絵本の館	橋型型の管内はぐるりと一周でき、赤ちゃん絵本、むかし話、工作や動物、植物、乗り物の絵本、紙芝居・大型絵本・布絵本などがいっぱいあります。
幌加内町	道立自然公園 朱鞠内湖	四季を通じて、自然を感じられるアルパカ牧場は山頂まで続く道を散策したり、山頂からの眺めがよく、夏でも冬でも楽しめます。
	そばの花 ビューポイント	そばの作付面積日本一だからこの風景。一面に広がる「白い絨毯」は絶好の撮影スポットです。毎年8月の最終日には「新そば祭り」が開催されます。
和寒町	塩狩峠記念館	作家三浦綾子さん旧宅を復元し、小説「氷点」執筆の部屋や小説・映画「塩狩峠」に関する資料などを展示しています。
	三笠山自然公園 こどもの国	ゴーカート、ハイスクリュータワー、豆汽車、スカイダンゴなどの遊具があり、子どもから大人まで一日中楽しめます。



天塩川歴史資料館



天塩町鏡沼海浜公園



サロベツ湿原センター



兜沼公園キャンプ場



トナカイ観光牧場



金田心象書道美術館



中川町エコミュージアムセンター自然誌博物館



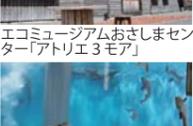
オートキャンプ場ナポートパーク



エコミュージアムおさしまセンター「アトリエ3モア」



天塩川リバーサイドキャンプ場



森林公園びふかアイランド



トロッコ王国



名寄市北国博物館



なよろ市立天文台きたすばる



名寄ピヤシリススキー場



万里長城・桜ヶ丘公園



五味温泉



岩尾内湖 白樺キャンプ場



士別市立博物館



羊と雲の丘



絵本の館



ピバアルパカ牧場



道立自然公園朱鞠内湖



そばの花 ビューポイント



塩狩峠記念館



三笠山自然公園 こどもの国